

職場で思うこと

関根芳朗

3月に駐村研究員のお話がありましたが、生来の筆無精、私のようなものがお役に立つかと疑問を持ちました。しかし、以前お世話になった経過もあり、お引き受けした次第であります。

さて、私は農協に20年間勤めてまいりました。東京から北へ50km圏の茨城県西部が私の住居です。都市近郊の園芸地帯のそこで、2年間の県外赴任を除いて同じ園芸の仕事にずっと携わっております。家は少しばかりの水稻と野菜を生産出荷する第Ⅱ種兼業農家で、当然農協の組合員でもあります。また、私が住んでいる集落は全くの農村で常日頃から農家と接触しており、その点では普通の農協職員より恵まれた環境にあると思います。

園芸の話ですが、私の仕事でいう担当地域は特に野菜づくりがさかんです。白菜やレタス、ネギなど首都圏でも1、2位を占める露地野菜産地で、産地動向もここ10年の数字を見る限り、あまり変化をしておりません。しかし、最近感じることは生産者の数が年々減っていることで以前からおつきあひした方々の姿が会合でも見られなくなってまいりました。代わりに若い方が見える場合もありますが、その数を満たすまでには十分いきません。これまで懇意にさせて頂いた皆さんが野菜作りをやめて、単に米だけとか、息子さんの代になって隠居されるというのは誠に残念であります。

しかし、私がこの仕事についてからずっと現役の人でもまだまだ多数いることは、心強いことであります。また、なかには元気のある人も出てきました。何人かの人を雇用し、企業的に野菜づくりをしている人達です。目は輝き、農業を商取引とみての話には熱が入っております。こういう人達も多くなってきて

いるのも最近の傾向です。白菜20ヘクタール、レタス15ヘクタールなど2桁の面積をお隣の栃木県まで行って耕作している人達、また養液施設栽培で周年大規模化に取り組んでいるなど逞しい限りであります。我々も頑張らなければならないのもこういう人達のお陰です。

私もずっと同じ仕事をしてきて、どう変わってきたのか筆を進めているうちにふと考えてしまいました。かつては時間的にだいぶ余裕があったなあとと思います。農家の集まりには酒がつきもので会議よりもそちらの方が主であったような気が致します。昭和50年頃、野菜集荷所は集落単位で大きいものでも100坪ぐらいでした。それも集落公民館隣とか農協の支所などにありましたから巡回するにしろ、その数がたくさんあってなかなか廻りきれものではありませんでした。今のように町の一カ所にまとめられた真空予冷庫付き、コンピューター完備の何百坪の大型集荷場とはえらい違いでした。私は経済連の職員ですが、当時の新人の仕事は集荷所を巡回して、その場所を知ること、検査の立合いをすることでした。そして生産者への情報として、当日の青果市況整理表と品目の販売状況をコピーしてよく持っていったものです。集荷所では茶わん酒とマグロのブツ切りで農家情報と野菜の話をしてることが茶飯の事でありました。今考えて見れば、のどかでありました。

今、職員は大変です。OA化が進み情報はすべてファックス、青果市場もドレス情報、機械を駆使しながら集荷・分荷対応、場合によっては販促活動もしなければならぬ尖鋭的な業務が要求されております。良い意味でプロ化した感じがしますが、デスクワークに偏りがちです。現場、特に農家との接触を大事にする我々と若い人はブツかってしまいます。そして最後に私が言うことは、農業への情熱論となってしまいます。今、農協組織は大揺れしております。特に県、町村段階では

J Aの広域化，組織事業のしくみ再編と話が
進んでおります。農協系統が全体的に下降気
味のなかで，若い農協職員特に営農指導員の
奮発を大いに期待したいものです。

（茨城県猿島郡総和町・茨城県経済連）